

ウクライナ視察議員「ひとごとではない」



ロシアの侵攻にさらされているウクライナに2年半前、日本の国会議員団が視察に訪れていた。ウクライナ政府高官らが当時強調していたロシアの脅威は現実のものに。議員らは「同じ隣人をもつ国としてひとごとではない」と危機感を強める。衆院は1日、「ロシア軍による侵略を最も強い言葉で非難する」との決議を採択した。

「自由・民主主義・経済の豊かさを求め、欧州連合（EU）

ウクライナのホンチャルク首相（当時、左から4人目）との記念撮影に臨む日本の国会議員ら（2019年9月23日、キエフの首相府、新藤義孝衆院議員提供）

に加盟する悲願が、外部の権力者によって毀損されることは断じて許されない」。超党派でつくる日本・ウクライナ友好議員連盟会長の森英介元法相（自民党衆院議員）は取材に語った。

森氏は2011年に議連会長に就き、13、15年にウクライナを訪問した。19年9月には衆院憲法審査会長として、公明、立憲民主、国民民主各党の計6人でウクライナを視察した。ウクライナは14年にクリミア半島をロシアに武力で奪われた。19年春に初当選したゼレンスキー大統領に起用されたホンチャルク首相（当時）は議員団に「ウクライナと日本を結びつける一つ

が共通の『隣人』（ロシア）だ」と述べた。他の政府高官らもロシアの脅威を口にし、日本との連携に期待を示していた。

森氏は「日本への期待は大きい。できる限りの支援をする」とが重要だ」と語った。視察に参加した自民の新藤義孝元総務相は「ウクライナ側が、民主主義国家としての価値や自負を力説したことが印象的だった」と振り返り、「ひとごとではない。国際社会と協調しながら断固とした対応を取るべきだ」と述べた。視察時は国民民主で、現在は立憲民主の奥野総一郎氏は、キエフの市街地で見かけた写真を忘れない。クリミアでの戦闘で亡くなった兵士のものだった。「危機はずっと続いていたことを忘れてはならない」（大久保貴裕）